

コンビニ罰ゲーム

//★タイトルコール

真奈佳 「ぱちぱちぱいす」

真奈佳 「コンビニ罰ゲーム」

//★イントロダクション

真奈佳 「コンビニバイト先輩のあなたが、まだ新人なJ
ロの真奈佳とはじめた罰ゲーム。」

真奈佳 「最初はお互い仕事のミスを減らすために始めた
ものだったが……。」

真奈佳 「客足が少なくなる深夜。」

真奈佳 「お互い相手に要求する罰ゲームが徐々にえっち
な方向へと進んでいき、エスカレートしたあな
たの要求に真奈佳は「罰ゲームだから仕方な
い」と受け入れていくのだった……。」

●「コンビニ店内（夕方）

//トラック1 「コンビニ罰ゲーム」

真奈佳 「ありがとうございましたー」

真奈佳 「ふ~つ、やつとお客さん落ち着きましたね」

真奈佳 「この時間、本当に大変ですよね。部活帰りの学
生さんとかたくさん来ますから……もうクタク
タです」

真奈佳

「えつ？ 先輩はまだ平氣？ ううつ、仕方ないじゃないですか。私は、まだやつと3ヶ月の研修を終えたところなんですから」

真奈佳

「先輩みたいに1年近くやってたら慣れるのかもされませんけど……」

真奈佳

「でも……先輩も結構ミスしますよね？ あつ、思い出した！ さつきも商品の陳列間違えてましたし」

真奈佳

「そりです。私が気付かなかつたら、ずっと間違えたままになつてましたよ」

真奈佳

「そりそり、感謝してくださいね。店長に小言を言われずに済んだんですか？」

真奈佳

「……で、ルールはわかつてますよね？ ……そうです。ミスをしたら罰ゲーム。今回は何にしましようか？」

真奈佳

「あつ、そりだ。デコポンにします？ すく威力が上がる方法を友達に教えてもらつたんですよ」

真奈佳

「この前は全然痛くなかったみたいですから、今日はそのリベンジです」

真奈佳

「いいですか？ いきますよ～」

真奈佳

「…………どうですか？…………あれ？ 痛く
ないですか？」

「あれえ～？ ちゃんと教えてもらひつた通りにし
たのに……も、もう一回だけいいですか？」

「これでも全然痛くない…………と。ううん、なんで
だろ」

「あっ、いらっしゃいませ～」

「（小声で）お客様、増えてきましたね。一氣
にレジに来たりしないといいんですけど……
…」

「（小声で）って、うわっ……先輩！」めんなさ
い。フラグ立てちゃいました。」

「お待ちのお客様！」ちらのレジにどうぞ～！」

「お品物3点でお会計1256円になり……

「あ、はい？ ポストですか？」

「それでしたら、お店を出て右に曲がったすぐの
ところに「ヤマジます。……はい……ありがとう

「ございました～」

真奈佳

真奈佳

「…………ふう。…………え？ なんですか？ ……
お釣り？ 渡したかどうか？ えっと、お金を
受け取って……ポストの位置を聞かれて……
……あつ！ 渡してない！！」

真奈佳

「えつ！？ せ、先輩が行ってくれるんですか？
すいません！ 「れお釣りです！！」

真奈佳

「あつちやー、釣銭の受け渡しミスはやらかした
うー！」

真奈佳

「レジの金額で差異を出すと店長めちゃめちゃ怒
るんだよなあ……」

真奈佳

「あ、どうでしたか？ ……間に合った？ あ
あ、良かつたあ」

真奈佳

「先輩。ホントすいません！ ありがとう」「ざい
ました」

真奈佳

「はい、会計の時にポストの位置を聞かれて、…
…それで……お釣りを渡し忘れちゃいました」

「…………なんですか、そのニヤけ顔は……
わかつてます。罰ゲームですよね。大人しく受
けます」

真奈佳

「デコピンですか？ ……いいですよ。いいです
けど……あ、あんまり力一杯しないでください
ね？ ……約束ですよ？ 絶対ですからね？」

真奈佳 「では…………どうぞ……」

真奈佳 「づあツツ！……？ いツツツ…………たああああああああああああツツ！……！」

真奈佳 「痛いっ！ ものす」「く痛いです！ なんでそんなに痛くするんですか！！」

真奈佳 「これでも手加減したつて？……」、信じられません！ ううううううつ、痛いい…………

真奈佳 「せ、先輩がミスした時に、絶対このお返しはしますからね！」

真奈佳 「うう…………それにしても痛いよ…………って、あつ、もうこんな時間だ！」

真奈佳 「先輩、もうそろそろサラリーマンの帰宅ラッシュの時間ですし、お酒コーナーの補充をお願いします！」

真奈佳 「はい、レジの方は私が“ミスをしないように”しっかりと見てますので、がっつり補充しちゃってください！」

真奈佳 「ありがとうございました！」

真奈佳 「ふう……いきなりすごい数のお客さんが来ましたね。さすがに疲れました」

●「コンビニ店内（夜・サラリーマン帰宅ラッシュ後）

真奈佳

「でも、これからはほとんどお客様来ない時間帯ですし、ちょっとのんびりできたりですね」「と」ろで……先輩？　さつきお客様に渡したタバコの銘柄……間違えましたよ」

真奈佳

「……そうですよ！　先輩が補充してるとおりお客様からクレームがありましたし」「レシートを確認させてもらいましたが、レジ担当も先輩の名前だったんですけど……これは罰ゲームですよね？」

真奈佳
真奈佳

「じゃあ……何をしてもらいましょうか。私のデコンだとあまり効果がないですし……」

真奈佳

「そりだ！　今、ちょうどお客様も居ないですし、今日の売上目標まであと少しなんで、久々に何か買ってお店に貢献してください」「はい、大丈夫です。そんなに高いものにしませんから。えっと……何にしようかな」

真奈佳

「夜ご飯になるようなものとかはこの前しましたよね。同じだとつまらないしお菓子類……も、同じだし……」「あつ、本なんてどうですか？　女性向けのファンション誌……は、さすがに先輩には必要ありませんよね」

真奈佳

真奈佳

「先輩も読める本は……………あ、あれなんかぴつたりじゃないですか。…………ほら、あそ」……………」

真奈佳

「そうです。成人男性向けの本です。先輩にピッタリでしょう?」

真奈佳

「はい、買つてきてください。好きなもの選んできていいですか?」

真奈佳

「ダメです。ちゃんと自分で選んでください。私はレジのところで待つてますから」

真奈佳

「ほらほら、早くしないと他のお客様が来ちゃいますよ」

真奈佳

「いらっしゃいませ~、エッチな本一冊で宜しいですか~? 880円になります」

真奈佳

「ほうほう、先輩はそういうのが好きなんですね?」

真奈佳

「あはははっ! 頭つ、顔真っ赤ですよ!
えつ! ? もしかして、『』いう本を買ったの
初めてですか! ?」

真奈佳

「あはははっ、おもしろい! 先輩って意外と
『』いうのに耐性ないんですね」

真奈佳

「は——つ、お腹痛い…………しばりへ」「ついづ
覗ゲームもいいかもしないですね」

●「ハル」店内（深夜）

真奈佳 「ありがとハ」「ありがとうございました」

真奈佳 「……お客様誰もいなくなっちゃいましたね。
しばりはのんびりできれう」

真奈佳 「はー？ 今がチャンス？ 何がですか？」

真奈佳 「掃除した時の箒はどうしたか？ 私が掃除した
時に使った箒ですか？ ……えと、さつきお店
の外を掃除しましたけど…………掃除した後は
……確か……」「…………」

真奈佳 「あれ？ やうじえば……どうしたつけ？ ……
えつ？ 入口のところに置きつ放しだったから
片づけた！？」

真奈佳 「うう、す、すいません。ちょっとボーッし
てたのかも……」

真奈佳 「あ……チャンスつてもしかして……覗ゲームの

……？ あれはそういう意味だったんですね
か！」

//イリック2 「ハッチな覗ゲーム」

真奈佳

「ち、ちょっと待ってください！　罰ゲームは受けますけどエッチな本はつ……エッチな本を買うとかそういうのだけは勘弁してください！」

真奈佳

「あんなの買つても使い道ないし、うち親と一緒に住んでるんで、見つかったら大変な事になるんです！」

真奈佳

「そこを……そこをなんとか！　他のことなら恥ずかしい」とでもいいですから！」

真奈佳

「…………え？　本当に何でもいいのかって？　えと……わ、私にできることなら、ですけど……」

真奈佳

「はい？　エ、エッチなこと、ですか？　それは……ば、罰ゲームの範囲なら、し、仕方ないと思います」

真奈佳

「胸……？　胸を……？　あの、聞こえないんですけど……」

真奈佳

「なんで先輩が顔を赤くしてるんですか！　もうつ、いいからはつきり言ってくださいよ！　私の胸がどうしたんですか！？」

真奈佳

「胸を……タッチ？　えと……要するに、さ、触りたいってことですか？」

真奈佳

「あ、ああ……そういう方向、なんですね……まあ、ば、罰ゲームらしい、ですよね！」

真奈佳

「えと…………や、そのくらい、なり……ち、ちょっとなり……いいですよ」

真奈佳

「本当にちょっとですからね！ 思いつきり鷺掴みとかはダメですか？ らね！…………優しくするなり…………ど、どつぞ」

真奈佳

「…………あの、本当にいいですか？ 早くしとくください」

真奈佳

「…………ん？ 今？ んんっ？ ……今、手は伸ばしてきましたけど……触つてませんよね？」

真奈佳

「え？ 触ったんですか？ 全然触られた感じがなかったんですけど……先輩、その……触った感触はあつたんですか？」

真奈佳

「なかつた？ それじゃあ罰ゲームにならないじゃないですか」

真奈佳

「えと……もう少し、ちゃんと触っていいですよ。今は服に触れたか触れてないかって感じですから」

真奈佳

「せ、先輩が物怖じしてどうするんですか！？罰ゲームだからですよ。触ってほしいとか考
えてるわけじゃないですかからねー」「

真奈佳 「わ、わかればいいんです……それじゃあ…
…その、どうぞ……」

真奈佳 「ふふああひ……？」

真奈佳 「な、何やつて……んあひ、つ、強すぎー。強す
ぎますつてばー！ しかもそこ、つ、指、ん
あつ、乳首つ……」

真奈佳 「はあひ、はあひ、はあひ……はあひ……
び、びっくりした」

真奈佳 「もうひ、お密さんがないなかつたから良かつたで
すけど、どう考えても強すぎますよー。」

真奈佳 「あ、いえ、そ、そこまで深く頭を下げなくとも
……わ、わざとじゃないのはわかつてますから
……」

真奈佳 「……先輩、もしかして、『ういうのつて初めて
なんですか？ ……あ、やつぱり』

真奈佳 「じゃあ……本当に加減がわからなかつたんです
ね。……それであんなに強く……」

真奈佳 「ああ、もう謝らなくていいですかー！」

真奈佳

「それに、もとはと聞えば私が先輩にエッチな本を貰わせたのが原因かもしませんし……」

真奈佳

「もう一度としない？」「ういう罰ゲームもうしないってことですか？」

真奈佳

「で、でも、ほら、お互いにミスをしないように罰ゲームをやっていたわけですし、……私も気にしてないですから、そんなに落ち込まないで大丈夫ですよ？」

真奈佳

「い、いや……別に触られたいとかそういうふうに思つてるんじゃないですよ！？　ただ、毎回同じ罰ゲームだと慣れてきちゃいますから、それだと罰ゲームにならないですし……」「、こんなふうに、お互いに恥ずかしい思いをするなら……罰ゲームとして成立してると思うんです」

真奈佳

「それに……い、今のだって、ちゃんと触ったつて言えるのかどうか……だから……も、もう一度……ちゃんとやり直しましょう」「

真奈佳

「そ、そうです。やり直します。やり直しつてことば……や、そういうことです」

真奈佳

「は、はい……今度は……今度こそ……や、優しく……触つてくださいね」

真奈佳

も、もう……いいって言つているじゃないですか。早くしないと誰かお客さんが来ちゃいますよ」

「あとで怒つたりしませんから……」
「……………」
「……………」

「ん、ふうつ…………そ、そり…………そのへ、ひ

いの、力加減が……い、いいです」

真奈佳
「ああ、あー、あはは、恥ずかしい、…なんだか…ほ、本当に…罰ゲームって、感じですよね…しかも、お、お店の中で…」

「だ、大丈夫です……ふう、う、誰も……き、来

「えつ？ い、いつまで、ん、あ、やつて、いいのかつて？ そ、それは……ふあ、う……お、お客様さんが、く、来るまでで、んんつ……い、いいんじや、ないですか？」

「はあ……はあ……体熱い……ああ

真奈佳

「ふあつー? あ、ち、ちょっと待って……ん、
んつ……い、いえ、痛かったわけじゃなくて……
…………や、その…………」

真奈佳

「先輩の、ゆ、指……親指が、あ、当たってる、
とこ」「ろ……ち、乳首、なんで……」「
擦れると、ちょっと……かも、ち……いい」

真奈佳

「し、仕方ないじゃないですか……そこは、あ……
……び、敏感、なんで……んあつ、あ、あの、だ
から……乳首は……！」

真奈佳

「だ、だめって、わけじや、あ、ないけど……
んうつ、声が、も、漏れ、ちゃう」

真奈佳

「他のお客さんが、い、いないつて……んあつ、
そ、そ�ですけど……」

真奈佳

「でも、誰か来て……」「んなどろ……み、見り
れたら……」

真奈佳

「え、……バックヤードのほうに移動するかっ
て? 確かに、そっちに移動すれば、お客様
から見られる心配はなくなりますけど……」

真奈佳

「ん、んつ、もう、さつきから、んくつ、乳首、
ぱっかり……」

真奈佳

「先輩……もしかして、わかっていてやってま
す?」

真奈佳

「……なんとなく、ポチッとしたのがある程度つて……まあ、ブラしますから、触ってるほうは案外わからないのかもしませんけど」

真奈佳

「えっ？ 次の罰ゲーム？ ま、待ってください。なんで罰ゲームが複数なんですか！？」

真奈佳

「何度も失敗したから？ そ、それは……確かにさつきは立て続けにミスがありましたけど……」

真奈佳

「まあ、先輩のフォローもあって防げたものもあります……」

真奈佳

「わかりました。次の罰ゲームはなんですか？」

真奈佳

「…………ブ、ブラジャーを外す！？ 今、ここでですか！？」

真奈佳

「そ、そんなこと……お客様が来たらどうするんですか！？」

真奈佳

「…………いや、確かにこここの制服は生地が厚いんで透けたりしませんけど……でも……」

真奈佳

「…………いや、確かにこここの制服は生地が厚いんで透けたりしませんけど……でも……」

真奈佳

「はあー、…………わかりました。ブラを……外せばいいんですね？」

真奈佳

「…………外しました。これで……いいですか？」

真奈佳

「次の罰ゲーム？ そうですよね……なんとなく
そう来るのは思つてましたけど……」

真奈佳

「当ててみましょうか？ ブラジャーのなくなっ
た私の胸を……さ、触るつもりなんでしょう？」

真奈佳

「か、覚悟はできていますから、先輩の好きなよつ
に——」

真奈佳

「ひつ！？ ……お、お客様が……
い、いらしゃいませ~」

真奈佳

「に、220円ちょうどいただきます。
ありがとうございました」

真奈佳

「…………はあっ、び、びっくりした。あの人、
き、気付いてませんよね？ 私が、ブラジャー
してなかつたって」

真奈佳

「たぶん大丈夫って……ほ、本当に透けたりして
ませんか？ か、形がわかりやすくなつてると
か？」

真奈佳

「やつぱり……バックヤードに移動したほうがい
いかもしれないですね」

真奈佳

「「J」「J」「J」と落ち着かないでし……じゃあ……
…………行かましょ、か」

// テリトリー3 「罰ゲームに従います」

●バックヤード 深夜

真奈佳

「「J」なら……どんな罰ゲームでも……できま
す、ね」

「それで……他に誰もいないと」ろに連れて
来て……ど、どんな罰ゲームをするんですか?
やつぱつ……ほ、本当に……また、胸を触る
んですか?」

真奈佳

「い、いえっ、大丈夫です！ 先輩になら……
……ど、どんな罰ゲームでも……大丈夫で
す」

「えつ？ 制服のボタンを外したい？ む、脱が
せたいって……それだと……せ、先輩に見られ
ちゃうんですけど……」

真奈佳

「たくさんミスをしたから、そのくらじの罰ゲー
ムがちょうどいい？」

真奈佳

「もう……先輩がこんなにエッチな人だなんて知
りませんでした」

真奈佳

「でも……私がたくさんミスをしたのは事実
ですから……罰ゲームに、従います」

真奈佳 「ぬ、脱ぎました……」れで……いいですか？」

真奈佳 「えつ？ 今、どんな気持ちかって？ ど、どつと……われても……恥ずかしいです」

真奈佳 「とても恥ずかしいですけど……ば、罰ゲーム……ですか？」

真奈佳 「あとは……先輩の好きなように……してください」

真奈佳 「んあつ…………はあつ…………先輩の、手の、熱が…………あ、あつ、はつきり、と、ふあつ…………わかる」

真奈佳 「服の上から、とは…………んつ、全然、ちが、う…………ああつ…………」

真奈佳 「先輩は、あ、ど、どうですか？ んあ、はつ……氣持ち、よ、良かつたり、するんですか？」

真奈佳 「…………そう、なんですね。ん、ああつ……心臓、は、破裂、しそ……」

真奈佳 「はあつ…………はあつ…………あの、ん、んんつ、お客様が、あ、来る、まで…………ですよ？」

真奈佳 「罰ゲーム、は…………あ、んつ…………そこまで、で、ですから、ね？」

真奈佳

「ひあつー? そ」「あ……あ、あつ、ち、乳首つ……乳首に、あ、当たって、ます……」

真奈佳

「んんっ、ちょっ、あつ……なんで、んっ、逃げたら、お、追いかけてくるんですか!?」

真奈佳

「ん」「は、あ、んんんっ、う……か、感じ、過ぎ……ふ、う、ああつ……わ、わざとです

か……?」

真奈佳

「ば、罰ゲーム、だからって……んああつ、それは、あ、そう、ですけど……あ、あつ……」

真奈佳

「あんまり、そ、そ」「ぱっかり……んんんっ、されたら、あ、ふあつ……声が、あ、で、出ちや、ああつ……」

真奈佳

「んはつ、あ、ああつ、本当に、ま、待つて……力が、抜け……んんんっ、刺激が、あ、強すぎ、う……」

真奈佳

「はあつ……はあつ……えつ? どんなつて……んん、うつ、 McConnell 言われても……はああつ……ああつ……」

真奈佳

「こんなに、も、揉まれて、ん、あつ、乳首、こ、擦られ、たら……ああつ、気持ち、いい……があんつ……」

真奈佳

「はい、あ、ああつ、これ、気持ちいい、です……んあつ、体が、熱く、なって……ふ、あ、ああつ……頭が、と、飛んじやい、やう……！」

真奈佳

「あ、あつ、これ以上、さ、されたら、あ、んあつ……もう、た、立つて、いられなんんんつ……？」

真奈佳

「だから、あ、乳首つ……乳首を、お、んんうつ、く……つ、摘まんだら、ふあつ、あつ、ああつ、きゅつて、し、しちゃ……ひああつ、それ、ず、ずっと、したらあああ……」

……

真奈佳

「え……？ もうと、罰ゲーム……？」

真奈佳

「んんんうつ……？ あ、あのつ、先輩つ……？ なんで……乳首、い、す、吸つて……んふああああつ……！」

真奈佳

「あ、あつ、そんな、舐められ……んあつ、それ、ビリビリ、するつ……！ んくあああつ、だ、ダメえつ……！」

真奈佳

「先輩、ほ、本当に、んあ、う、くあつ、乳首、あ、痺れ……ふ、はあああつ……ああああつ、ちゅーちゅー、しちゃ、あああつ……」

……

真奈佳

「……ういう事、ん、あつ、先輩……んんうつ、
し、したかつたん、ですか？ あ、ふああつ……
…！」

真奈佳

「そんなに、ち、乳首、吸つたら……あ、赤ちゃ
ん、みたい……」

真奈佳

「ん、ふふつ……ちょっとだけ、あ、カワイイ、
かも……あ、ああつ……ふあああんつ……」

真奈佳

「これも、罰ゲーム、んんうつ、なん、ですよ
ね？ それ、なら……はああつ、もう……んん
んつ、先輩の、す、好きなように、して、くだ
さい」

真奈佳

「はあつ……はああつ……きも、ち……いい……
体が……ん、ああつ……溶け、そつ……」

真奈佳

「は、ああつ……先輩……ああつ、先輩……も、
もつと、お……」「

真奈佳

「あ……い、今のは……あ、んんんつ、そ、その
……ん、んつ、はい、き、気持ち良く、
なつてたら、あ、んつ……罰ゲームに、な、な
らない、ですけど……」

真奈佳

「でも、せ、先輩の、む、胸の、揉み方、とか……
んあつ……乳首の、吸い方とか、あ、じ、上
手、で……」

「私……ああつ、私の……気持ち、いい……す」

「く、う、気持ちいい、ん、です……」

「えつ？ 私が、エツチな、女の子……？ ち、違います、う、これは……そ、そういうのじゃ、なくて……」

「先輩が、あ、あああつ、上手だから、ああつ、だから、か、感じちゃう、ん、です……んはああつ……」

「あああつ、乳首が、あ、せ、先輩の、舌で……んああつ、ペロペロされて、あ……ダメつ、声つ……出ちゃう……」

「あ、ふあつ、あ、あああつ、ん、はつ、ふ、はあつ、あ、はあああつ、あああんつ……！」

「ふ、あ……？ セ、先輩？ あのつ、は、反対の手が……下に……」

「ふうつ、く、ふつ……それも……？ それも罰ゲーム、んん、なんですか？ でも、そつちは……あ、あつ、スカートの、中に……」「

「そつち、触っちゃ……？ ふあつ……？ ほ、本当に、んんつ、触る、なんて……はあつ、はあつ……セ「は、あ、い、一番、恥ずかしいとこ……」

真奈佳

「あ、また……あ、あつ、私……んああつ、た、
触られて……あああつ、おひぱい、だけじゃな
くぐ……し、下のほう、も……ああつ、こ、
擦つちや……」

真奈佳

「そ」「は、あ、んんつ……あ、あつ、本当に、
そつちも、す、するんですか？」

真奈佳

「い、嫌つてわけじや、あ……ない、けど……ふ
ああつ、そつちまで、さ、されたら、あ、ん
あつ……」

真奈佳

「はあつ、はあつ、はあつ、あ、ああつ、そんな
に強く、されたり……はあつ、ぐ、食い込ん
じゅう」「

真奈佳

「何がつて……んんつ、い、言わなくとも、わ、
わかりますよね？」

真奈佳

「え、ええつ？ 聞きたい、つて、んんんつ……
ど」「に、ぐ、食い込んでるのか、つて、ん
あつ、そ、それ、もしかして……エツチなこ
と、を、言わせよう、と、しますか？」

真奈佳

「もうだ、つて、んん、うつ……せ、先輩、そ
うのが、あ、好き、だったんですか？」

真奈佳

「はあつ、はあつ……あ、あつ、好きかも、つて、んんつ、そんな、はつきり言われた、ち……はあつ、はあつ……これも、罰ゲーム、つて、「と、ですか？」

真奈佳

「う、んんつ、罰ゲームなら、あ、ふあつ……し、仕方ない、のかな……ああつ……。」

真奈佳

「せ、先輩つ、指が、あ……グリグリつて、んんつ、パ、パンツに、く、食い込んで……ふああつ……あ……。」

真奈佳

「は、はい、言います……んは、あつ、お……ま、んこ、です……んんうつ、おまんこ、に……先輩の、指が、んんつ、食い込んで、ます」

真奈佳

「あつ、そ、そこ……ん、あつ、そこは、い、一番、感じ……あああつ……。」

真奈佳

「ああつ、は、ああつ……濡れて、る？ んんつ、おまんこが、ですか？ ……だ、だつて、仕方ないじゃないですか？」

真奈佳

「こ……んなに、んん、うつ、気持ちいい事、ふ、ううつ、ずっと……ずっと、されたら……ああつ……。」

真奈佳

「されたら……んんつ、こ、興奮……しますよ」

真奈佳

「そ、そうです……ふ、あつ……先輩に、い、
いっぱい、エッチな」とされて……あ、あ
あつ、興奮してるんです」

真奈佳

「興奮したから、ぬ、濡れて……あああつ、そん
なにグリグリされたら、あ……パンツが、よ、
汚れちゃう」

真奈佳

「す」「く濡れてるって……は、あつ、そうしたの
は、せ、先輩じゃないですか」

真奈佳

「えつ？ 濡れてるなら脱げばって……そ、んな
……恥ずかしい」と……

真奈佳

「もうたくさん恥ずかしいことはしてるって……
それはそうですが……でも、そこを……おま
んこ、を、見られるのは……おっぱい、見られ
るより……恥ずかしいです」

真奈佳

「恥ずかしいから罰ゲームになる？ 確かにそう
ですけど……あ、ああつ、せ、先輩っ！？ な
んでスカートの中に手を入れるんですか……
……？」

真奈佳

「やつ、ダメです！ そこはダメって……い、
言つているのに……」

真奈佳

「今日の先輩、エッチ過ぎますよ……ほ、本当に
パンツを下ろすなんて……」

真奈佳

「ダメです。」のスカートを押されてる手は離しません。そんな事したら本当に見えちゃいます」

真奈佳

「で、手をどかそとしないでください。本当に見えちゃうんですよ…」

真奈佳

「ほ、本当に見たいって言われても……確かに罰ゲームにはなりますけど、でも……」

真奈佳

「あああっ、ひ、引っ張らないでください！ 何をニヤニヤしてるんですか！ 先輩、もしかして楽しinですか！？」

真奈佳

「そ」は……「」は本当にダメ——
やつー？」

真奈佳
真奈佳

「あいたつ！…………い、たたたたたつ…………もう、足が滑っちゃったじゃないですか」「…………つて、きやあつー？ わ、私、今つ……思いつきり足を開いて……」

真奈佳

「先輩、今……み、見ましたよねー？ ……なんで今更顔を真っ赤にしてるんですか！ 見ようとしてたじやないですか！？」

真奈佳

「『』いうハプニングで見てしまうとドキドキする？ 意味がわかりません……っていうか、やっぱり見たんじゃないですか！」

真奈佳

「ああもう、恥ずかしい……おっぱいを見せるの
だつてす」「く恥ずかしくて緊張してたのに…
…」

真奈佳

「それなのに……私の大事なところまで先輩に見
られちゃって……」

真奈佳

「はあ……もういいです……見られちゃつたって
思つたら、これ以上隠しても仕方ない気がして
きました……」

真奈佳

「先輩……罰ゲーム……最後まで、してくれ
ますか？」

真奈佳

「いいの？ って、今更そんな」と聞きます。
…………本當の事を言つと……先輩にエッチな
「とされると、す」「く体が熱くなるんです」

真奈佳

「熱くなつて……気持ち良くなつて……も、
もつと……してほしいって……思つちゃつたん
です」

真奈佳

「だから、先輩……もつとす」「い……
ツチな、罰ゲーム……してください」

//トラック4 「もつとす」「いエッチな罰ゲームをしてください」

「ああ……先輩……」

「わ、私……こんな格好……パンツも履いてない
のに、先輩の前でこんなに足を開いて……」

真奈佳

「もう、は、恥ずかしくて死にそうです」

「あ、あつ、そんな……開くなんて……あ、あつ、そんな事したら、お、おまんこ、奥のほうまで……見えちゃう」

「先輩、見ないで……見ないでください」

「そんなふうに言わると見たくなるって……日の先輩、いつもと違いすぎます」

「んあつー? そこは……あ、ふあつ、ク、クリトリス……」

「ああんつ、それを、んんつ、クニクニしたら……あ、あふつ……ダメえつ……」

「はあつ、はあつ……お、おつきく、なつてる、私……あふあつ、先輩に、エッチなこと、されて……ああんつ、クリトリス、大きくなっちゃつてる」

「恥ずかしい、のに、んあつ、でも、体が熱くて……ふ、ああつ、せ、先輩……そこ、あ、もつと……」

「は、はい、ああつ、もつと、して……んんんつ、もつと、気持ち良くてほしいです」

真奈佳

「エッチな、女の子……？ は、はい、そうです
……んんうつ、私、ほ、本当は……あ、あつ、
エッチな、女の子なんです」

真奈佳

「き、今日だつて、本当は、あ、あつ、先輩
が、おっぱい、触りたいって、い、言つてきた
とき……んはあつ、エッチなこと、されるん
だあつて……ドキドキ、してたんですよ」

真奈佳

「だから、さ、最初に、ふんつ、触ったのか、
ど、どうかも、わからないのは……さ、寂しい
感じがして……ん、んんつ、もつと強く、触っ
てほしくて、それで……あ、ああああつ……！」

真奈佳

「クリトリス、あ、「、転がすみたいに、される
と……はああつ、気持ち、いい……んんつ、お
まんこ」、ぬ、濡れちゃ、う……！」

真奈佳

「あ、ああつ…？ 先輩、それつ……あ、あつ、
おまんこの、んんうつ、ぬるぬる、したのを…
…ぶあつ、ク、クリトリスに、塗る、なんて…
…ああつ…！」

真奈佳

「ひやわああつ…？ か、皮も、あ、んあつ、塗
りながら、クリトリスの、か、皮あ、む、剥い
ちゃ……あああああつ…！」

真奈佳

「これ、す、す”い、ああつ、む、剥き出しのク
リトリス、く、はああつ、そんなに強く、は、
速く、刺激したら、あ、あ、あああつ、ふ、
くう、あああああああああああッ！…！」

真奈佳

「先輩つ、ああつ、なんで、ん、はつ、こんな
に、う、うまつ……あああつ、そこ、お、そこ
そこそこおおおつ、気持ちいいよおおお
つ…！」

真奈佳

「自分でするより、んはあつ、気持ち、あ、ああ
あつ、良すぎ、ひ、あああつ、う、はあ
あああつ…！」

真奈佳

「んあ、あつ……えつ？ 自分で、ん、あ
…い、今のは……あ、ああつ！」

真奈佳
真奈佳

「ち、ちがつ、あ、ふあつ、今のは、あ…せ、
先輩の聞き間違いです！」

「んは、あつ、じ、自分で、なんて、んはつ、は
ああつ、い、言つてない…はあああつ、そこ
グリグリいい、す、するのはあああ…
…！」

「…！」

真奈佳

「ま、待つてください！ それ、あ、あつ、つ、
強いつ、あはああつ、む、剥き出しなのに、
ぎゅつてしたら、はあ、あああつ…！」

真奈佳

「う、『めんなさい』… 聞き間違いや、あ
あつ、ないです！ い、言いました！ 自分
でつて……」

真奈佳

「正直に言いますから、んひやああつ、もう少
弱くしてください…」

真奈佳

「ん、はあつ…………？ はあつ、あああつ
…あ、あ、ふああつ、そのくらいが、あ、ち、
ちよつど、いいです」

真奈佳

「はあつ、はああつ、自分でつて、いうのは、あ
…それは…「つうつ、ど、どうしても、
言わないとダメですか？」

真奈佳

「これは罰ゲームだから… んんつ、それを
言われると…はあつ…わ、わかりまし
た」

真奈佳

「ひ、1人で、んんつ、すること、お、あ、あり
ます…あ、ああつ、ムラムラ、する、こと、
ふあつ、あります、んんつ…」

真奈佳

「オ、オナニーって…はつきり、言わないでく
ださい…んはあつ、でも、そ、そうです…
あ、あつ、オナニー、し、したこと、ありま
す」

真奈佳

「どんなふうにって、んんあつ、や、そこ」まで言
わないとダメなんですか？」

真奈佳

「罰ゲームのは……あ、はつ、わかつて、ます
けど……あ、んんつ、でも、これを言つたら…
…せ、先輩に、引かれちゃいそうで…」

真奈佳

「引かないって、ふあ、あつ、ほ、本当ですか?
絶対、ですよ? あ、んんつ……約束ですか
らね!」

真奈佳

「あああつ、だいたい、い、いつもは、夜…
あ、んつ、自分の部屋で、はあつ…はあつ…
…します」

真奈佳

「あ、でも、んくつ、時々は、ト、トイレ、とか
…んあああつ…」

真奈佳

「やり方、は、ああ、今、せ、先輩が、してくれ
てるみたいな、か、感じ…指で、んあつ、ク
リトリスを、ふ、あつ、揉むみたいに、するん
です」

真奈佳

「手を、足で挟んで…んんつ、横向きでするの
が、あ、好き、です…」

真奈佳

「な、何回くじらつて…ん、もう…私…あ
ふ、あ、先輩に、秘密が無くなっちゃいます
よ」

真奈佳

「あ、く、はあつ……ふあつ、私、んあつ、
じ、自分でも、わかつて、る、ん、ですけど……
んんんつ、性欲が、お、女の子に、しては、
強いみたいで、ふあつ……か、回数、お、多い
ん、です」

真奈佳

「お、多い、ときは、あ、ふ、ああつ、一日
に、い、んひいつ、さ、さん、かいつ、ん
んつ、3回とか、あ、時々、あります」

真奈佳

「あ、んんつ、いえ、一番多い、のは、あ、あ
あつ、い、一回だけ、ふ、あああつ、ろ、6
回、した」と、あります」

真奈佳

「そ、そんなに驚かないで、く、ださい……は
あつ、はあつ、家に、初めて、あふ、あつ、
パソコンが来て、あ、んんつ、だんだん使える
よつに、なってきて……」

真奈佳

「それで、あ、んつ、き、興味がわいて、あ、ふ
あつ、それで……エツチな、単語を、あ、あ、
検索してみたら……す、す」「いのが、出てきて
……」

真奈佳

「その日は、あ、ち、ちょうど、あ、あつ、私し
かいなくして、それで……お、お母さんが帰って
くるまで……あ、あああつ……」

真奈佳

「ああもうつ、は、話しちゃった、あ、こんな……秘密、あ、ふつ、い、今まで、誰にも、んんんっ、話したことなかつたのに……！」

真奈佳

「ふ、あつ……？ オナニーが、す、好きか、どうかって……あ、んんつ、そんなの、い、言えません！」

真奈佳

「言わなくたって……そ、想像はつくでしょう？」

真奈佳

「んんんつ、ぐ、ふつ……私の口から聞きたいって……あが、あつ、んあつ……先輩、もしかして……案外サディストなんですか？」

「あ、あつ、もう……あ、んんうつ……す、好き、です……ふあ、好きじゃなかつたら、ろ、6回もしません！」

真奈佳

「好き、です、ああ、んつ、オナニー、好き、あ、あつ、オナニー大好きです、ん、あああつ……」

真奈佳

「せ、先輩、は、あつ、はあつ……引いて、ませんか？ こんな……オナニー大好きで、ふあ、んつ、一日に、6回も、んんつ、オナニーして、る、女の子なんて……」

真奈佳

「え、ええつ！？ 興奮したつて……そ、そういう反応なんですか！？」

真奈佳

「いえ……ひ、引かれるよりは……い、いいです
けど……あ、んんんつ、その、動き……ひい
んつ、すいぐ、き、気持ちいい、です…」

真奈佳

「あああつ、クリトリスの、皮つ……剥いたら、
あ、「こ」こんなに……気持ちいい、なんて…
し、知らなかつた」

真奈佳

「はい、あ、んんつ、今まで、「怖くて、あ、
あつ、したこと、なかつたんで……」

真奈佳

「は、はいつ、んんんうつ、いいです、う、こ
れつ……ずっと……ずっと、してほしい、で
す」

真奈佳

「ふあ、あああつ、はじ……おまんこ、いいで
す、んん、んんんつ、おまんこが、す」「
く、う、……奥のまつ、が……きゅんきゅんし
ます」

真奈佳

「ああああつ、いいよおおつ、剥き出しのクリト
リスううつ、く、ふつ、ぐにぐにされるのい
よおおおつ、気持ちいいよおおおおつ…
……」

真奈佳

「私、も、もうつ……イクッ、う、ううつ、イ
ク、イ、イッちや、う、ううあつ、このなの、
され、たら、あ、あああつ、イクッ、おまん
こ、イ、イッちゃいます！」

真奈佳

「先輩っ、私、ああっ、もう、が、我慢できませ
んっ！ イクッ、ああっ、イッちやう、イッ
ちゃ、う、うううううううううううううううう
イクッ、ううう、イクッ！」

真奈佳

イケイケイケイケツ、うう、イケ、う、イケ
ツ、イクイクイク、く、くうううつ、イクイク
イクイクイクイクイクイクイクイクイクイクイ
クイクウウウウウウ

真奈佳

真奈佳
あ、はああつ、ああつ、うひやああ
ああつ！？ ス、ストップ！！ セんぱつ…
…手つ、と、止めつ…………手を止めてください
いっ……」

「イキました！ イキましたから、……」
激つ、強すぎます！ もう止めてください
いっ！」

真奈佳

真奈佳

「す」「かつた……ああ……本当に……
…イッちやい、ました……」

真奈佳

「はあああ……頭、あ……飛び、そつ
…もつ、何も……考えられない」

真奈佳

「はあつ……はあつ……はあつ……私……ひどい
格好になつてますよね？ こんな……バイト先
のバックヤードで、おっぱいもおまんこも丸出
しにして……足はこんなに開いちやつて……び
ちょびちょに、濡らしちやつて……」

真奈佳

「罰ゲーム……」んなにす「い事する日が来るな
んて思いませんでした」

真奈佳

「わう……そんなにじつと見ないでください
よ。今だつて恥ずかしいですから……」

真奈佳

「えつ？ どうして足を開じないのかつて？ そ
んなの決まつてるじゃないですか」

真奈佳

「先輩が……見たそとにしてるからですよ」

真奈佳

「私も、なんだか今は……先輩を見てほいつ
て、思つちゃつて……」

真奈佳

「す」「く恥ずかしいけど……ひどい格好だつて思
うけど……私の全部を……先輩に見てほいん
です」

真奈佳

「ふふつ、変ですよね? こんな……濡れたおまんこを、見られたいなんて……変態ですよね」

真奈佳

「えつ? わかる? 先輩もわかるんですか?」

真奈佳

「先輩のも……見てほしい? えつ? 何を……ですか?」

真奈佳

「…………ええつー? せ、先輩のもつて……も、もしかして……」

真奈佳

「先輩の…………おちん、ちん…………て、意味ですか?」

真奈佳

「私に……見られたい、ん、ですか? 興奮して……そういうふうに、なっちゃったんですか?」

真奈佳

「い、いえつ、別に……嫌なわけじゃなくて……びっくりしちゃって……」

真奈佳

「でも……わ、私も……見たい……先輩の……おちんちん……見てみたい、です」

真奈佳

「あ、あ……す”い……」、こんなに大きいなんて……」

真奈佳

「な、生で見たのは初めてです。想像してたよりも……なんて、言つか……す”いです」

真奈佳

「す」「過ぎて……ドキドキしてきて……ああ、先輩の……おちんちん……先輩のおちんちん、見ちゃつてる」

真奈佳

「えつ？ オカズに……？ あ……は、はい……私、き、きつと……次のオナニーするとき、先輩のおちんちんをオカズにしちゃう」

真奈佳

「先輩も……？ 先輩もオナニーするとき……私のおまんこ」、オカズにするんですか？」

真奈佳
真奈佳
真奈佳
真奈佳

「本当は今したいって……ふつ、この状況で、ですか？ お互に……おちんちんと、おまんこを見ながら……オナニー、とか？」

「そういうのも……いいかもしませんけど……でも、この状況なら……」

「もう……そこで不思議そうな顔しないでくださいよ。」の状況ですよ?」

真奈佳
真奈佳
真奈佳
真奈佳

「女の子が無防備に足を開いて濡れたおまんこを見せて……それを見てる先輩のおちんちんは勃起してて……」

「オナニーよりも……もうとしたい」と……あるんじやないですか？」

真奈佳
真奈佳
真奈佳
真奈佳

「入れたく……ないんですか？」

真奈佳

「わかつてます。自分が何を言つてゐるのかは……」
…

真奈佳

「えつ？ 罰ゲームにしてもやり過ぎ？ ……
…確かにそうかもしませんね。これは、罰
ゲームの範疇を超えてるのかも……」

真奈佳

「でも……心配いりませんよ。だつて
ツチする相手が先輩だつたり……罰ゲームには
なりませんから……」

真奈佳

「……ふつ、なんですかその顔は……。そんなに
驚かないでくださいよ」

真奈佳

「自分でも……」「んな恥ずかしい格好で……恥ず
かしい告白してゐるつて自覚はあるんですけどから」

真奈佳
真奈佳

「だから、何度も言わせないでください。先輩が
したいなら……私は……ほり……」

真奈佳

「うやつて……自分でおまんこ拡げちゃう」「と
だつてできるんですから……」

真奈佳

「見えますか？ 私のおまんこ……おまんこの
奥の奥まで……一番恥ずかしいところまで見え
ちゃつてますか？」

真奈佳

「ここに……おちんちん、入れてみたいと思いま
せんか？」

真奈佳

「んはああつ！？ せ、先輩つ……！ あ、あ
あつ、熱いつ……先輩のが、あ、おちんちんが
……私の、中に……！」

真奈佳

「ん、んん、うつ……は、入ってるんですね？
これ、この感覚……全部、入ったんです
か？」

真奈佳

「あ……本当だ。先輩のが入ってる」

真奈佳

「痛み？ ああ、ちょっとだけ痛いですけど……
想像してたほどじゃないです」

真奈佳

「あつ、初めてですよ！ あまり痛みは感じませ
んでしたけど、先輩以外の人としたことありま
せんから！」

真奈佳

「そ、そういうえば……十分に濡れてたら、処女で
も痛くないって聞いたことがあります」

真奈佳

「そう、ですね……ものすごく……濡れますか
ら……」

真奈佳

「し、仕方ないじゃないですか。先輩にあんなに
……おっぱい揉まれたり、吸われたり、おまん
こ触られたりしたんですから……」

真奈佳

「特にあのクリトリス責めが本当に気持ち良くて
……あんなの覚えたら、オナニーじゃ満足でき
なくなっちゃいそうで……」

真奈佳

「それなのにこんな……あ、おちんちんがビクビクしてるのがわかります」

真奈佳

「どうしよう。もうどうキドキしてきちゃいました」

真奈佳

「こんなの……先輩のおちんちんの感触を知っちゃった……私、本当にオナニーしても物足りなくなっちゃいそうで……」

真奈佳

「あつ……！　あ、あつ……おちんちん、が……動いて……ふ、ああ……！」

真奈佳

「はい、ゆっくりだったら、もう動いても大丈夫だと思います」

真奈佳

「んはつ……あつ……あつ、あつ、あつ……あああつ、擦れて、る……あああつ……！」

真奈佳

「これが……セックス……んんつ、セックス、なんですね」

真奈佳

「ああつ、ああつ、お腹の奥に、ん、あつ、響く、感じが、あ……あ、あ、ああつ……」

「すうい、ですね、んあつ……本当に、ひ、ひとつになつた感じが、します」

真奈佳

「か、硬い、あ、硬くて、熱い……ふ、あつ、おまんこで、あ、んんんっ、こんなにはつきり、わかるんだ……」

真奈佳

「えつ？ あ、本当だ……血が、出できましたね……ふふっ、良かった、あ、ああっ……」

真奈佳

「んん、うつ、どうして、良かったのかって？ んぶ、うつ、それは……ん、んつ、これで、あ、あつ、私が処女だったって、んんんっ……証明になるじゃないですか？」

真奈佳

「そり、ですよ、んうつ、ふつ……私の処女……んつく、先輩に、捧げたんですよ」

真奈佳
真奈佳

「はああつ、あ、責任、とつてくださいね？ ……あ、んんつ、なんて言つたら、ふふっ、重すぎでしようか？」

真奈佳

「ひやつー？ そ、そんな大きな声で……しかも、とるつて……」

真奈佳

「あんつ、あんつ、な、何度も、言わなくていいですか……んんつ、責任、とつてくれるんですね？」

真奈佳

「ふふっ、どんな責任の取り方、なのかなあ、あつ、あとで、聞かせてください……ああんつー！」

真奈佳

「い、今……あ、そこです……ふあつ……ふあつ……おちんちんが、当たつてるとこ」が
……き、気持ちいい」

真奈佳

「はい、そこです……ああ、クリトリス、で、す
るのとは、あんつ、違つた感じで……ああ、氣
持ちいいのが、あ、体の中に、な、流れ込んで
くる」

真奈佳

「あ、あ、そこを、ああんつ、ずつと、された
ら、ふあつ……んんんうつ……」

真奈佳

「ぐ、ふうつ……ああ、「うすると……お、おま
んこに、力を入れると……んんんつ、おちんち
んの、感触が、もっと強く……わかります」

真奈佳

「先輩は……?」「うやつて、締め付けてるほ
が、いいですか?」

真奈佳

「んんうつ、そつなんですね……んつく、締め付
けてる、ほうが……先輩も、気持ちいいんで
すね」

真奈佳

「だつたら……んつぐ……んう、ふつ……んん
……んんんんつ、ずつと……し、締め付け、
ちゃいます」

真奈佳

「んうつ……んんうつ……ぐ、ふつ、ううつ……
どうですか? 先輩……気持ち、いいです
か?」

真奈佳

「んぶうつ！？ せ、先輩……んううつ、動き
が、あ、あつ、す」へ、ち、力強く……く、
ふあつ……！？」

真奈佳

「はい、あ、んんつ、このくらいの、速さな
ら、あ、んあつ、だ、大丈夫です」

真奈佳

「す」へ……ああつ、速いほうが、ふあ、あつ、
気持ち、いいいつ……！」

真奈佳

「はい、もつと……んん、あつ、そのまま、あ、
あつ、そこ」を……あんんんつ、擦つて……！」

真奈佳

「そこ」、あああつ、気持ちいいつ、ふ、あつ、ビ
リビリする、う……んは、あつ、ふああつ……
！」

真奈佳

「そのまま、んあつ、さ、それたら、ふああつ、
また、イクッ、んんうつ、イキ、そ……！」

真奈佳

「なん、でつ……んあつ、先輩、ふ、はつ……私
の、か、感じるところ、お、ふあつ……わかる
んですか？」

真奈佳

「ん、ああつ、わかつて、わけじゃない、ん、
ですか？ それ、なのに……あ、あああ
んつ！」

「気持ちいいつ、あはあつ、気持ち良くて、あ、
んんつ、頭が、蕩けちゃう……！」

真奈佳

「おまんこも、濡れて、あ、んんうつ……これ、
音……ふああつ、ぐちゅぐちゅって、んん
んつ、」の音……わ、私から、あ、出てる…
……？」

真奈佳

「あ、ああつ、」「んな、い、いやらしい音……ふ
ああつ、私の中、から、出てるなんて……あ、
あんつ、恥ず、かしい……！」

真奈佳

「締め付け、てるのに、あんつ、すごく、ち、
力強く、動いて……ああつ、たまらな
いつ！」

真奈佳

「せ、先輩は……？ 先輩はどうですか？ んん
んつ、気持ち、いいですか？」

真奈佳

「そう、ですか……んつぐ、良かつた……でも、
ん、んん、ふつ……だんだん、な、慣れてきま
したから、あ、ああつ、先輩の、う、動きたい
ように、ひ、あつ、動いていいですか？」

「…」

真奈佳

「あ、あつ、もつと強く、し、したかったら、ん
はあつ、お、思いつきり、ひ、ああつ、やって
いいですか？」

真奈佳

「んくああつ……ま、また……？ もつと、
あ、んんんつ、おちんちん、が、大きくなつた
……？」

「うあ、あああつ、どんどん、ひ、拡げられる、感じが、あ……します……！？」

真奈佳
「大丈夫です！ もう全然、んんんつ、痛くなくて……それ、より……あつ、気持ちいい、のが、ふ、ああつ、体中に、ひ、広がってくる……！」

真奈佳
「くあああんつ！？ お、おっぱいまで……？
あ、ふあつ、そんな、あ、んあつ、手のひらいっぱいに、揉みながら、あ、ひやああんつ、乳首つ、あ、ああつ、指で、グリグリされたらあ……！？」

真奈佳
「し、信じられない……！ んはああつ、もつと、気持ち良く、なるなんて……あ、ああああつ！？」

真奈佳
「あ、あ、ああつ、あああつ、おっぱいも、おまんこも、気持ちいいつ……！ どっちも、お、んはああつ、感じるううつ……！」

真奈佳
「セックステ、んあつ、こんなに、あ、気持ちいい、もの、だつたんですね！」

真奈佳
「えつ？ 先輩も初めてだから……あ、そうだつたんですね……んんうつ、ふふつ、エッチな本を買うだけで、あんなに恥ずかしがつてるくらいですから、あ、ああつ、それはそうですよね」

真奈佳

「でも、じゃあ、あああつ、先輩も、んんうつ、童貞、だったのに……ふあつ、あ、ああつ、私が、それを、んんうつ、もうつちゃったんですね」

真奈佳

「ふあつ、あ、ああつ、なんだか……うれ、しい……ひあああんつ……！」

真奈佳

「す」「い、どんどん、んんんつ、激しく……んくうつ……先輩つ……もつと……あああつ、もつと激しくしてええつ……！」

真奈佳

「ふあつ…？ んは、あつ、あああああああああツ……！」

真奈佳

「ひ、響く、う、んはあつ、お腹の、奥に、ああんつ、ずんつて、くるつ、う、ああつ、深いところ、に、あ、ああつ、当たってる、のが、ああつ、わかる……！」

真奈佳

「せ、先輩つ……ああつ、先輩つ……もう、このまま、あ、最後まで……！ ひあああつ、私の中で、さ、最後、まで、んあつ、してつ……してくださいつ……！」

真奈佳

「は、はいつ、んあつ、はいいつ、最後は、あ、ああつ、中でつ……んあつ、だ、大丈夫です、からつ……先輩が、い、嫌で、なれば……！」

真奈佳

「ふあ、ああつ……あ、あ、あつ、こ、こんなに、力強い、なんて……ふ、うう、あつ、先輩、すゞぐ、んんつ、男らしい、です……！」

真奈佳

「そんな、顔……あんつ、初めて、見るつ……ふあ、ああつ、おっぱいが、あ、んんんんうつ……！」

真奈佳

「大丈夫、う、もつと、んあつ、こね回す、ように、あ、あつ、気持ち良ぐ、して、くださいつ！」

真奈佳

「私も、んんんつ、ち、力いつぱい、締め付けます、から……！」

真奈佳

「ん、んんうつ、こんな、感じで……いいですか？ ちやんと、し、締め付けられますか？」

真奈佳

「…………よ、良かつた。んあつ、じやあんんんつ、もつと、ぎゅつしますね」

真奈佳

「もつとぎゅつとして、ん、くつ……先輩のおちんちん、んうつ、気持ち良くしちゃいますね」

真奈佳

「ん、んつ、だから先輩も、くぶつ、え、遠慮なく、うはああつ、動いてください……！」

真奈佳

「はあ、ふ、ああつ、ズンズン、ぐるう、う、ん
んつ、お腹の奥に、あ、あつ、響いてくるの
が、は、あつ、気持ちいいつー！」

真奈佳

「こんなの……あ、んんつ、こんなの初めてつ…
…ひあ、あ、気持ち、良すぎて、あんんんつ、
体が溶けちゃいそつ…！」

真奈佳

「先輩つ、あ、あつ、もつと、あ、んんうつ、
もつと激しく……私のおまんこ、ふ、あつ、
もつと、力いっぱい、突いてくださいー！」

真奈佳

「あ、はあつ、ああつ、そこつ……おちんちん
の、さ、先っぽが、あ、ふあああつ、当たつて
る、ん、んんんつ、うつ、一番、気持ちいいと
ころに、ひ、当たつてるつ……！」

真奈佳

「ずっと、ああつ、ずっとそ！」、それたら、あ、
ああつ、私、またイクッ、うううつ、またイフ
ちやう、ん、んんんつ、さつき、イ、イつたの
に、ひ、んんんつー！」

真奈佳

「ひはああつ、な、何これつー？ おまんこのほ
うに、あ、ああつ、何かくるつ、せ、先輩つ、
私、あ、変な感じ……！」

「おまんこ」がつ、ああつ、氣持ち良すぎて、あ、ああつ、何かが、き、来てるんです！」

「あ、あ、あああつ、出るつ、う、はあつ、出
ちゃう、あ、んあつ、おまんこ、出るつ、おま
んこ」出ちやうつうつ……」

「い、「ぬくなさい」、私、そこ、あ、ああつ、
弱いと」「う、ずっと、されたら、あ、あつ、も
うダメ、イクシ、あ、あんつ、さつきなり
も、ふ、ふああつ、イッちやううう……」

「が、我慢、できないつ、ああつ、これ、あ、ご
めつ、せ、せんぱつ、あ、あああつ、「めんな
さ……、出るつ……出ちやうううう……」

「んはあああああああああああああああ
あ

——ジツ……」「

「は、ああつ、な、何これえつ……、あ、あ
ああつ、おしつこ、みたいな、あ、でも、ち
が、あ、ふ、はあつ、ああああつ……」

「ま、まだ出るつ、ん、はあつ、おまんこ、い、
擦られてる、から、あ、いやああつ、片まらな
いっ……」

真奈佳

真奈佳

真奈佳

真奈佳

真奈佳

真奈佳

真奈佳

「先輩つ、み、見ないで！ んはああつ、見ちゃ
だ、あ、めえええつ、あああああ、またイクウ
ウウツー！」

真奈佳

「ふああああああああああああ、き、気持ちい
いよおおお～」

真奈佳

「んはつ、ああつ、せんぱ、い、「め、ん、なさ
いつ、んはあつ、そ、そっちに、か、かかつ
ちゃつ、た、あああつ……！」

真奈佳

「くつはああつ！？ あああつ、も、もっと、ん
はあつ、激しく………？」

真奈佳

「ひ、ああつ、しお、ふきつ。ああつ、ん、今
の、ふ、ああつ、おしつこ、みたいのが、
ふ、ああつ、いっぱい出たのつて、んん
んあつ、潮吹きつて、い、言うんですか？」

真奈佳

「んあつ、は、ああつ、おし、つこ、じや、ない
んだ……！？ んは、あ、はああんつ！！」

真奈佳

「んは、ああつ、先輩の、んはつ、どんどん、
は、激しくなつて、あ、あつ、おちんちん、ん
んんつ、ビクビク、してる……！」

真奈佳

「イ、イきそう、なんですか？ んは、ああつ、
先輩も、あ、んんうつ、イきわう、に、なつて
るんですか？」

真奈佳

「あ、ん、はつ、き、きてつ、先輩つ！ ん、あ、ああつ、」の、まま、ふあつ、私の中に、きてつ！」

真奈佳

「一番、んんつ、深いところに、ふ、あつ、先輩の、んぐ、あつ、先輩の、熱いのを……私にくださいつ！」

真奈佳

「本当に、あ、んんんつ、出していいですから、あ、ひあつ、ここまできたら、あ、ああつ、最後まで、してくださいつ！！」

真奈佳

「ちゃんと、んは、あつ、出すまで、ふ、ああつ、先輩のこと離しませんから……」

真奈佳
真奈佳

「あ、んんつ、こ、」ういうの、嫌ですか？
あ、んんつ、全身、ぎゅつて、されるの……
ふ、あつ、嫌いですか？」

真奈佳

「んはつ、あ、嫌じやない？ それ、なら、あ、ああつ、も、もっと……んんんつ、先輩のこと、ぎゅつてしまします」

真奈佳

「先輩つ、んんんつ、だい、すきつ、んあ、はああつ、大好き、ですつ、んはああつ、大好きつ、大好きいつ、だいしゆきいいいつ！！」

真奈佳

ずっと、ふあんつ、大好き、でした、あ、だか
ら、あ、あつ、だから先輩のつ、ん、ああつ、
先輩の熱いのおつ、わ、私につ……私の中
につ、注ぎ込んでええつ！！」

真奈佳

「あ、ああっ、ん、はっ、ふあああ（）、それ
は、激しいっ、のが、ああつ、いいっ、それ、
ずっと、あ、あつ、私の中つ、突いてつ、ん
はつ、おまんこ突いてつ、ああつ、そのまま、
突いて、出して、ん、あああつ、出してほし
いっ！」

真奈佳

「私に、ああんつ、先輩の、んああつ、先輩の
を、くださいつ！ いっぽい、あ、ああつ、私
を、ふああんつ、大好きな、先輩のつ、あ、
あ、ああつ、先輩のものに、してくださ
いいいつ！！」

真奈佳

「あ、ふ、あ、はあああつ、せん、ぱいつ、ふあ、
ん、はああつ、せんぱあいつ、あ、くわ、ひ
ああんつ、あんつ、あ、ふ、はあつ、ああ
あつ、く、はあつ、あ、あ、あああつ、あああ
あつ、あああああああああああああつ……

! ! !

真奈佳

ツツツツツツツツ

真奈佳

「あふ、あ、はああああつ、熱いの、あ、きたつ……あ、んんんつ、先輩の、熱いの、お、ふあつ、入つて、きてるつ、あ、ああつ、すごい、勢いが……！」

真奈佳

「お腹の、奥が、あ、んんんつ、押し上げ、られる、みたいな、あ、ふあつ、中に、だ、出されたら、ああつ、こんな、感じが……！」

真奈佳

「ふ、あつ……あ、あつ……んあ、う……ああああ……」

真奈佳

「はあつ……はあつ……はあつ……はあつ……はあつ……ああ……イつ……ちやいました、よね？　あはは……最後まで……しちゃつたあ……はあああ……」

真奈佳

「ちょっと、んんつ……見てみたい……わつ、隙間からこぼれてる」

真奈佳

「これが……先輩の、精液……なんですね」

真奈佳

「本当に私の中に入っちゃったんだ……」

「あつ、大丈夫です。今日は本当に大丈夫な日ですから……」

真奈佳

「えつ？　それでもできちゃつたら？　その時は……えと……」

真奈佳

「へつー？ せ、責任取るつて……な、何言つて
……」んな、じ、状態で……えつ？ あ……
た、確かに、さつきもそんな話しましたけ
ど、あれは……ど、どちらかと言えば、その……
…男女交際、的な、意味で……」

真奈佳 「あ……そ、そうですね。とりあえず……抜きま
しようか」

真奈佳 「んふひ……わ、あ……ドロッて出できた
……」

真奈佳 「私も色々出しちゃつたし、掃除しないと……

真奈佳 「あいたたたたつ！ ううう、動くと痛い……

真奈佳 「あ、だ、大丈夫です。ゆっくりな、り……動けま
すから……」

真奈佳 「それよりも、交代の時間までにここを綺麗にし
ないと……えつと……掃除道具は……

…

真奈佳 「えつ？ 先輩がやつてくれるんですか？ ……
ありがとうございます！」

真奈佳 「それにしても……ふふふ、大変な事をしちゃい
ましたね。……仕事中なのに……こんなのバレ
たら一人ともクビですね」

真奈佳 「今度する時は、別の場所にしないと……」

真奈佳 「えっ？ 次、ですか？ 私は……次、も……あつていいと思つてます、けど……」

真奈佳 「先輩は……そのへん、どうなんですか？」

真奈佳 「……あつてもいい……本当ですか？」

真奈佳 「あの……私……い、一応……告白、み、みたい
なこと、しちやつたんですけど……先輩は……
その……ど、どう、思つてるんですか？」

真奈佳 「……こんな……その……オナニーばっかり
しているような女の子、ですけど……よ、
良かつた、ひ……」

真奈佳 「えっ？ その先は言わなくていいって……
あ、はい……先輩の……答えは……」

真奈佳 「せ、先輩……はい……これからも……よろ
しくお願ひします」

真奈佳 「先輩……大好き、です」

//おわり